シリーズ（その⑪・最終回）

TRY（トライ）ICT（シティー）やすぎ

ICT（情報通信技術）を活用した教育で学校や教室が変わる様子をシリーズでお伝えしています。

協力しながらプログラム

9月下旬、南小学校の6年生はプログラミングでドローンを操作し、設定されたコースの課題に挑戦しました。体育館に設定された4つのコース。指定された高度を飛行させたり、決められた角度で方向を転換したり。

3人グループで知恵を出し合いタブレットのプログラムを修正しながら問題を乗り切っていきます。まさにトライアルアンドエラーの濃密な学習でした。

児童の授業後の感想（一部略）

難しいコースだったけど、できないからやめるのではなく、どうやったらできるかをみんなで考えました。

▲ドローンのプログラミング修正を繰り返すグループ（南小学校）。

ICTを文房具に

市内小中学校では、「TRY ICTやすぎ」をキャッチフレーズに、子どもたちや教職員がICTを文房具のように自由な発想で活用し授業に取り入れることに取り組んでいます。

個性豊かな子どもたちを誰一人取り残すことなく、1人1台のタブレット端末を生かし、子どもたちが協働しながら学びを深め、ICTの活用が「当たり前」となることを目指すものです。その取り組みの一端をこの1年間にわたり広報紙でお伝えしてきました。

今後タブレット端末を家庭へ持ち帰っての活用や、デジタル教科書の本格的な導入への対応などICTの活用範囲はますます広がっていきます。家庭と学校とが連携、協力して子どもたちの学びを支えていくことがますます重要になってくると考えています。

◇◇◇◇◇

広報紙の連載は終了しますが、各学校のホームページでは「TRY ICTやすぎ」のコーナーで日々の取り組み状況を紹介しています。

引き続き、ご覧ください。

問い合わせ
学校教育課　☎23-3180

日本遺産を巡るたたらの音色

日本遺産の構成文化財

連載⑨

出雲國たたら風土記 THE TATARA FUDOKI OF IZUMO PROVINCE

今号はたたら製鉄の技術を受け継いだ角炉（かくろ）を紹介します。

角炉は、たたら製鉄の近代化を知るうえで欠くことのできない遺産であり、奥出雲町には、ほぼ完全な形で保存されている「鳥上木炭銑（とりかみもくたんせん）工場角炉」（非公開）、そして、ほぼ完全な形に復元された「槇原たたら角炉」の2カ所があります。

砂鉄と木炭を原料として銑鉄（せんてつ）（※）を生産する角型溶鉱炉（角炉）は、たたらによる銑鉄製造法と洋式製鉄技術を組み合わせています。明治9年に官営広島鉱山で開発されました。

山陰のたたら経営者は、炉高を上げ送風力を強化すれば、生産性が上がることを知っていました。割高な和鉄の生産性を向上させるため送風設備の動力化などが図られました。

炉は、煉瓦（れんが）製で小形高炉（こがたこうろじょう）状の造りになっています。たたら炉との類似点は、平面から見て長方形で両長辺に複数の送風管を配置していること。相違点は、炉の高さが、たたら炉1.2mに対して3mと高い形状をしていることです。そして、何より2～3カ月連続して操業が出来ることが増産につながりました。

このように角炉は、たたら製鉄から近代製鉄に移行する中間に位置する製鉄法です。槇原たたら角炉（たたら角炉伝承館）は、鉄師櫻井家がたたら製鉄の後、昭和20年まで操業していました。

当時がしのばれる施設です。ぜひ、見学してみてください。

（※）銑鉄は、溶けやすいため鋳物（いもの）などの材料になります

▲槇原たたら角炉（たたら角炉伝承館）。

問い合わせ
和鋼博物館　☎23-2500